

## 優秀賞 [高校生の部]

NRI学生小説コンテスト2011  
2025年の日本を担う  
わたしの夢  
入賞作品



「世界から貧困を吹き飛ばす」を夢に掲げ、カンボジアでの体験から問題解決策を提案。強いメッセージと若々しい意気込みが審査委員の心に響きました。

# 思考回路のイノベーションで 貧困を吹き飛ばせ

—援助から win-win ビジネスへ



島根県立隠岐島前高等学校1年

岩沢 壮太 いわさわ そうた

## 1. 私の夢

私の夢は「世界から貧困を吹き飛ばす」これに尽きる。

今世界には一日を1.25ドル未満で生活している人が約14億人、学校に行けない子どもが7,500万人以上いると言われている。だからといって私は同情は求めない。なぜなら、それでは世界は何も変わらないからだ。国のODAやNGO、NPOによる発展途上国への支援のほとんどは応急処置であり、それ以上の根本的な貧困スパイラルの変革を遂げることにはできない。「仕事がない→お金がない→子どもや家族が学校や病院へ行けない→子

どもが大人になっても字も読めないのに就職先などあるはずもない→仕事がない」という風な貧困スパイラルに巻き込まれている家族に、一日分の食事を与えて根本的な解決になるだろうか？ 私が先日カンボジアを訪れた際、道路の道端にサービスエリアを発見した。大きな建物に、床は大理石。おそらく莫大な費用をかけて造られたであろうこの建物の中にあるのはトイレと客のいないレストランのみ。車なんて私達の車を含め2台だけであった。そんな無駄だらけの建物が日本の援助で建てられたと聞いた時は愕然とした。と同時に援助では何も変わらないことを改めて確信した。

では、どうやって貧困をなくしていくのか？

私はビジネスでしか世界を変えることはできないだろうと考えている。それも、現在叫ばれている企業のCSRやソーシャルビジネスといった課題解決専用ではなく、利潤追求型つまり本来の企業の形で変えていけると考えている。

## 2. 大企業の発展途上国のとらえ方

——これまでとこれから

みなさんは何かのサービスや商品の値段を下げる時に何が一番効果的だと考えるだろうか？ この間に対して多くの大企業がとった対策は「人件費削減」だった。激しい価格競争の中で企業が求めたのは発展途上国の安い労働力だった。私がカンボジアのレンガ工場を訪れた際も多くの児童労働を目撃した。2,000個運んだら5ドルという出来高制だが実際は朝から晩まで働き続けても200個が限度。つまり一日0.5ドルで働いているということだ。後で責任者から話を聞くとこのレンガは先進国に輸出されるそうだ。

このように現代の企業からすると、発展途上国は低賃金で労働力を賄える絶好の場所としてのとらえ方しかない。たしかに企業側からすると安い労働力は非常に魅力的だが、それでは現地の人は住む家どころかその日の食

料すら賄うのが困難だ。

そんな中で、企業にとって安い労働力しかとりえがなかった発展途上国が、近年のBRICsと呼ばれる新興国の急速な発展によって、大きなビジネスチャンスの場合という風に変わりつつある。

そう言える理由は、日本のGDP伸び率と比較してもらえば一目瞭然だろう。日本のGDPは1999年から11年連続のマイナスである。さらに2010年では初の2%超えのマイナスを計上するなどいいことなした。それに比べほんの数十年前まで見向きもされなかった新興国の一つでもある中国の2010年GDP伸び率は10.3%と日本とは比べ物にならない。このような事を考えれば誰しも一つの結論にたどり着く。「日本で売っても売れないのでは？」。実際、日本企業が今次々と新興国に進出している。

BRICsは自ら自国の強みとなるものを持っていた。中国やインドは言うまでもなく莫大な労働力。ロシアとブラジルはそれぞれ貴重な資源を有している。しかし、資源や人などの強みが乏しい東南アジアやアフリカなどはなかなか発展できずにいる。このままいくと、15年後も現状を打破できないだろう。

私はどうすればこの現状を打破できるかと考えたが、その答えは一向にでないままだった。そのためこのままではいけないと感じ、つい先日ヒントを求めカンボジアの地に足を下ろした。そこで私が得たビジネスチャン

スから、貧困撲滅への大きな希望を感じた。その小さな光をみなさまにご紹介したい。

### 3. 発想転換から生まれる イノベーション ——援助からビジネスへ

カンボジアの乗り物名物といったら一番に出てくるのが「トゥクトゥク」だろう。バイクの後ろに籠?みたいな物が付いている乗り物だが、カンボジアではこのトゥクトゥクが日本というタクシー的役割を果たしている。観光客として行ったならば必ず一回は乗るであろうトゥクトゥクだが、これには大きな弱点がある。それはすべてが個人運営のため、人通りの多い道沿いや大きいホテルの前や観光名所は極端に台数が多いのに対し、それ以外の場所はまったくと言っていいほどいない。実際私が移動しようとした際も「トゥクトゥク乗りたいんだけども見当たらない」という場面が非常に多かった。さらに、さきほども述べたように個人運営であるため、ドライバーはその日いくら稼ぐかでその日食べられるご飯の量が決まってしまうので、客によって値段を上げたり、かなりしつこく勧誘する場面も少なくない。そのため警戒してトゥクトゥクには乗らないという観光客も増えつつある。つまり「信用」がないのだ。さらにはあまりにトゥクトゥクの数が多すぎて客がまったく取れない

日も珍しくはない。この三つの課題を見た時私はある解決策を思いついた。

私はまず、「株式会社:トゥクトゥク」を立ち上げ、現トゥクトゥクドライバーを正式に雇う。そして固定料金制を導入したり組織としてのサービスを徹底し、観光客から「信用」を獲得する。次に町中に「トゥクトゥク呼び出しボタン」を設置し、観光客が好きな場所で好きなタイミングで呼び出すことを可能とする。さらに、会社としての事務や経理などの労働力に、雇ったドライバーを充てることで「トゥクトゥクの過剰供給」という問題を解決でき、かつ新たな人件費を生み出す。さらにさらに、トゥクトゥクを会社として一まとめにすることによって広告ビジネスをも展開できる。これらを行うことによって、今までその日の食料で精一杯だったドライバーやその家族が、毎日安心して生活でき、子どもは元気に学校へ行け、学業やスキルを身につけることで貧困スパイラルを抜け出すことができる。のみならず得た利益でもっと多くの人を雇用したり新しいビジネスを展開できる。

私は、援助というどちらかが一方的に物やサービスを与えるのではなく、両者互いに汗水たらして働き、両者互いに利益を得る、このwin-winビジネスこそ世界から貧困をなくす最も効果的な策だと確信している。そして私は、このwin-winビジネスを、柔軟な心と優しい心を持ち合わせている日本人が率先して行い、世界をリードしていくべきだと考えている。

## 思考回路のイノベーションで貧困を吹き飛ばせ ——援助からwin-winビジネスへ

### 4. 私の夢

最初にも述べたように私の夢は「世界から貧困を吹き飛ばす」これに尽きる。だが、その夢を達成する過程でも大きな目標となるものを見つけた。それは、企業のCSRや国のODAで援助をするのではなく、両者互いに利益を追求するwin-winビジネスをこの日本全体として行い、世界をリードしていくことだ。さらに私が、その、世界をリードする日本をリードしていくことだ。今回私が紹介したビジネスプランは小さなものかもしれない。しかし私は、その先には必ず大きな結果が付いてくるのだと信じている。「世界の貧困がなくなるまで、私は絶対あきらめない」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%86%85%E7%B7%8F%E7%94%9F%E7%94%A3>  
・「中国の2010年GDP伸び率は10.3%」  
BRICS 辞典  
<http://www.brics-jp.com/china/gdp.html>

#### 引用元

- ・「一日の生活を1.25ドル未満で生活している人が約14億人以上」  
TheWorldBank <http://web.worldbank.org/WBSITE/EXTERNAL/NEWS/0,,contentMDK:21881807~pagePK:64257043~piPK:437376~theSitePK:4607,00.html>
- ・「学校に行っていない子どもが約7500万人」  
国際NGOワールド・ビジョン・ジャパン  
<http://www.worldvision.jp/learn/school/children/school.html>
- ・「日本のGDPは1999年から11年連続のマイナスである。さらに2010年では初の2%超えのマイナスを計上」  
Wikipedia「国内総生産」